最新の環境課題と川崎市の取組④

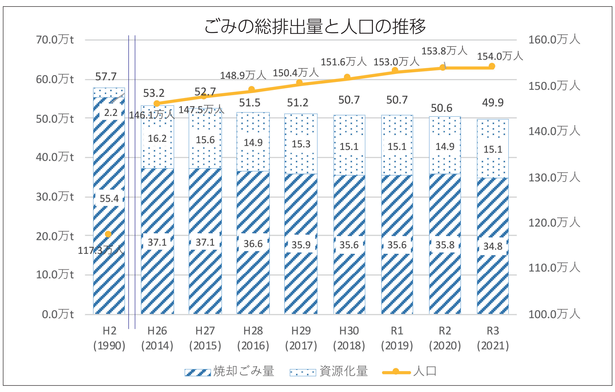
資源循環

2

現状

川崎市では、人口増加や経済発展とともにごみの排出量が増え続け、1990（平成2）年にはごみの排出量が市内のごみ焼却処理能力の限界に迫る状況となり、「ごみ非常事態」を宣言するに至りました。以降、空きびんやペットボトル、ミックスペーパーやプラスチック製容器包装などを分別収集して資源化を図るとともに、市民・事業者と協働でごみを減らすための普及啓発や環境学習を行うなど、資源循環型社会をめざした取組を進めることで、人口が増加していく中でも着実にごみの減量化・資源化をしてきました。

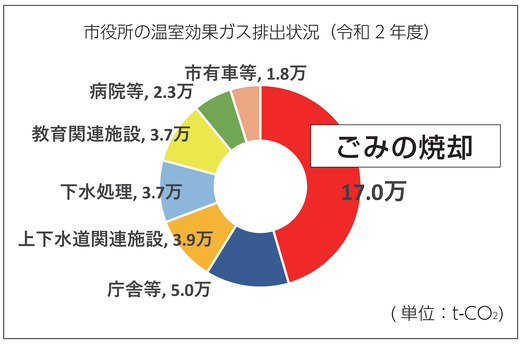
かわさき３R
推進キャラクター
かわるん



一方、近年では、プラスチックごみが年間数百万ｔも海に流出し、生態系への影響が懸念されるといった海洋汚染の問題や、中国及び周辺アジア地域における廃プラスチック等の輸入禁止措置に伴い、国内処理体制の整備確保が喫緊の課題となるなど、プラスチックごみを取り巻く状況は、急速に変化してきており、世界的な課題として注目されています。

川岸のプラスチックごみ（川から海へ流出）

プラスチックごみを燃やすと多くの温室効果ガスを排出することになり、川崎市のごみ焼却から排出される約17万ｔ-CO_2の約８割（2020（令和2）年度実績）が、プラスチックごみ焼却に由来するものです。地球温暖化対策の観点からも、今後はこうした課題にも対応していくことが必要です。



レジ袋を断るなどして
「ごみをできるだけ発生させない
（Reduce（リデュース））」

詰め替え商品など
「使えるものはなるべくくり返し使う
（Reuse（リユース））」

ペットボトルの分別など
「ごみの中で資源化できるものは
（Recycle（リサイクル））」